

特集

埼玉に根を張る

~外国人も日本人も幸せに暮らす地域を目指して~



特定非営利法人JIN愛育センター 代表 鄭錦伊(チョン クミ)さん

埼玉に暮らす外国出身の方の中には、地域に根を張り、積極的に地域と関わり生活している方が多くいらっしゃいます。「特定非営利法人JIN愛育センター」は2013年に韓国出身の方が介護事業の認可を受け、始めた在宅訪問介護事業所です。現在、日本人高齢者だけでなく、外国出身の高齢者も受け入れ、同じ国にルーツをもつヘルパーがサービスを提供するという形で介護サービスを展開しています。さらに、地域の子供達に学ぶ場を提供し、地域全体のつながりを広げ、深める活動を行っています。代表の鄭(チョン)さんにお話を伺いました。

高齢者の介護について考えたきっかけは?

私は結婚を機に、夢にまで見た主婦ライフを楽しみに来日し新生活を始めました。しかし、一年もすると、日本語もでき、生活に問題がなかったにも関わらず、社会から孤立しているような疎外感や不安を感じるようになり、「在日本大韓民国民団(民団)」に仕事はないか問い合わせをしました。ちょうど民団では、「みんだん生活相談センター」を立ち上げたところでしたが、当初の相談件数は月15件程度でした。そこで相談センターのマネジメントを任せられ、センターの創成期に関わりました。無料相談の中で、本当に言いたいこと、困っていることを聞き出し、必要な支援に結び付けることを心がけました。3年目には相談件数は月100件と増え、弁護士や司法書士などの専門家相談につなげることで、8割の相談については的確に解決し、納得してもらうことができました。しかし、残りの2割はどうにも解決できないもので、そのうち半分は高齢者からの「今は元気だが、年をとったらどうしよう。」「今後、一人で老後が不安だ。」というものでした。このとき、私にできることはここにあると確信しました。

団体設立は勘違いから…

2010年に川口市主催の外国人のための防災訓練に初めて参加した時、同じく訓練に参加していた山本さん(NPO法人民族フォーラム理事長)を主催者と勘違いし、「何かお手伝いできることがあれば」と声をかけました。それが縁となり、その後、山本さんから外国人が自ら積極的に活動できる新しい団体を作るという話を聞き、気付いたら、「多文化共生センター・川口」の立ち上げメンバーの一人として、団体の設立に携わっていました。この団体の大きな柱の一つに「外国人高齢者の介護」があり、初めは介護施設ボランティアとして、傾聴ボランティアや施設のお祭りの手伝いをしていました。しかし、もっと直接的に介護に関わりたいという気持ちがずっと強くありました。

その後、ヘルパーの資格を取ろうと思いましたが、博士課程まで修了し、韓国で培ったキャリアからくるプライドもあり、ヘルパーとしてトイレの介助ができるのか、その一点が不安でした。そこで、研修で施設に行った際に、トイレの係に立候補しました。初めて高齢者の方の下着を下ろし、トイレに座らせてあげたとき、頭を打ち抜かれた思いがしました。その場で心配しないといけないのは私のプライドではなく、相手の羞恥心ややるせない気持ちで、それらを汲み取るべきでした。そして、どれだけ自分が傲慢だったのか思い知らされました。申し訳ない気持ちでいっぱいになり、やらせていただくんだという思いに変化しました。

そして、多文化共生センターから枝分かれする形で2013年2月に「NPO法人JIN愛育センター」を立ち上げ、同年6月から介護保険事業に取り組むこととなりました。介護保険の許認可申請には行政窓口に何度も足を運び、申請が受理されるのに3か月かかりましたが、窓口の担当者はとても親身に対応してくださいました。



鄭さん夫妻とアドバイザーの山本さん(中央)

現在の事業展開

JIN愛育センターでは、地域の高齢者を日本人、外国人と区別せず、将来にわたり、最後まで家族の形で幸せに暮らすことをモットーとしています。認知症は、積み重なっている記憶の層が新しいものからなくなっていて、幼い頃の記憶のみが残っていくものです。そのため、在日歴が長く日本語も不自由なく使えた方でも、認知症を患うと、日本語を忘れ母語しか話せなくなる場合が往々にしてあります。また、介護者である家族が日本語ができない場合もあり、母国語で話せるヘルパーが対応し気持ちを汲むことで、言葉がわからないことによる怖さ、寂しさ、不安を解消することにつながります。現在、センターの利用者は約25人、そのうち外国人利用者は3割程度です。センターに在籍しているヘルパーは8名(うち2名中国人、2名韓国人)で、中国語、韓国語、片言の英語、日本語で対応しています。フィリピン人のヘルパーも含め登録ヘルパーは多く、適宜対応可能です。在宅訪問介護では、人対人で関わるため、ヘルパーは誰でも良いわけではなく、信頼できる人、人柄をとても大切にしています。在宅介護の現場では介護する側が行き詰まることも多く、家族のケアも重要です。ある台湾籍で来日歴60年の利用者は脳梗塞による半身麻痺で、中国籍の妻が長く介護を続けていました。男性は日本語ができましたが、妻は日本語がほとんどできず、夫婦喧嘩が絶えず、妻が夫を虐待するように。そこで、中国人ヘルパーが入り、妻の話を傾聴し対応することで虐待が収まりました。このケースでは、妻は日本語ができないため、ケアマネージャーや行政職員などが自分の悪口を言っているのではと疑心暗鬼になってしまい、夫への虐待に発展していました。このように夫婦どちらかが日本語ができ、それに頼り生活していたものが、どちらかが介護状態になり、バランスがくずれ、様々な問題が起こることがあります。そこに母国語のできるヘルパーが入ることで、双方のケアができ、家族が最後まで幸せな生活を続けることにつながります。



事務所敷地内にある菜園で野菜を収穫し、利用者宅へお届するなど。

今後の展望～地域をつなぐ～

センターでは学童保育事業も行っており(※1)、地域の子供が国語、英語、算数などを学んでいます。また、センターの活動とは別に、地域の公民館で毎年「絵本作り」のワークショップを開催しており、小学生が一から話を作り、絵を書き、製本します。低学年から参加し、高学年になると、スタッフとして小さな後輩達に教えるようになります。子供たちの成長が見られることがうれしく、地域の子供たちの夢に挑戦する気持ちを育てる手助けになればと思っています。

私は国際結婚をし、日本で家族と暮らしています。私が訪問介護事業に携わる中で、主人も共感し、同じくヘルパーの資格を取得し、今では一緒に介護事業に参加しています。また、70代の主人の母も同じく介護に興味をもつようになりました。夫婦で、そして家族で同じ方向に邁進できることはうれしく、そして力強く感じています。そして、センターのモットーである「最後まで家族で」を形にするシェアハウスを現在建設中です。介護の必要な高齢者が家族とともに入所し、必要なケアを受けながら、家族の形で生活を続けることを可能にし、あわせて地域の高齢者と地域に暮らす人々を繋ぐ場にしたいと考えています。地域の高齢者と子供に出会いの場を提供し、外国人やその文化に触れる機会になればというのが私達夫婦の願いです。埼玉県は在留外国人数が全国で5番目に多く、今後外国人高齢者が増加することが予想され、対応できる施設を増やすことは地域の喫緊の課題です。今、私達の夢が実現に向かっているのは、支えてくれているスタッフや応援してくださる方達の力が大きく、本当に感謝しています。

今、介護認定調査の場に立ち会う通訳が不足しています。外国人高齢者の多くは日本語ができなかったり、日本語を忘れ母語に戻ってしまっていたりで、ケアマネージャーに自分の不調や状況を伝えることさえ難しい状況です。介護保険制度では通訳費用は対象外ということもあります。どうにかできないか模索中です。もし外国人高齢者が介護のことに困っている方がいらっしゃれば、ボランティアを派遣します。誰にも相談できず、一人で悩んでいる方はたくさんいると思います。そういう助けの必要な方に一人でも多く私達の活動を知ってもらえばと思います。



子供達の絵本作りイベント



中国人利用者(左)と中国人ヘルパー(右)